

巻頭言

長田 俊樹

インダス・プロジェクトは正式には『環境変化とインダス文明』という総合地球環境学研究所（略称：地球研）が行うプロジェクトの一つである。本論集を読まれる方のなかには、地球研やインダス・プロジェクトについて、まったく聞いたことがない方もいらっしゃると思うので、かんたんに説明し、この論集の序文としたい。

総合地球環境学研究所は2001年4月、文部科学省の大学共同利用機関として創設された。その設立趣旨は地球環境問題の解決に向けた学問の創出のための総合的研究を行うことを目指している。その目玉が既存の学問分野・領域で研究活動を区分せず、研究プロジェクト方式で総合的な研究を展開することである。研究プロジェクトは最初にインキュベーション研究（IS）を行い、その後ISから予備研究（フィージビリティ・スタディー：FS）に進み、FSから正式なプロジェクトに進むには評価委員会による審査に通る必要がある。評価委員会の評点（0点から4点の5段階評価）の平均が2.00以上であることが最低条件である。あらかじめ提出された書類とプロジェクト・リーダーによるプレゼンテーションによって、審査が行われる。そこで、プロジェクトとして認められた場合には、前段階として1年間のプレ・リサーチ（PR）を経て、5年間の本研究（FR）が行われる。

インダス・プロジェクトは2003年10月に長田が地球研に着任した際にISとして出発し、当初は「言語学的手法による古代文明の生活環境復元とその総合的検証」という名称で言語学を前面に出したプロジェクトであったが、FSへ進む審査の際に、言語学をもちいて環境復元をおこなうという手法について評価委員会から批判が出たために、FSでは「インダス文明の生活環境復元とその衰退原因の究明」とテーマを変更した。2005年3月に、再び評価委員会に臨んだが、このプロジェクト内容が地球研の趣旨にあわないとして本研究に進むことが許されなかった。そこで、「環境変化とインダス文明」という環境変化により重点を移したプロジェクトとして再提出した結果、2006年2月に評価委員会で認められ、現在、本研究2年目に至っている。

プロジェクトの重点を環境変化に移したとはいえ、言語学研究者として言語学をなんらかの形でプロジェクトに生かせないかと本研究が始まったあとも考え続けてきた。2007年4月から、類型論研究で知られた言語学者である大西正幸さんがプロジェクト上級研究員として着任したのを期に、インダス・プロジェクト言語研究会と言語記述研究会を発足させ、

当初の計画よりずっと小規模ではあるが、プロジェクトに言語学的アプローチを復活させることにしたのである。前者の研究会では南アジアに分布するインド・アーリア諸語、ドラヴィダ諸語、ムンダ諸語、チベット・ビルマ諸語の概説と個別言語の文法を書くことや南アジアの言語地図を作成することなどを目的とし、後者の研究会では言語記述を目指す若い研究者たちを中心に勉強会に近いような形で進めている。この論集は後者の研究会メンバーによる成果であり、いわば若い研究者たちによる研究発表の場である。今回は研究会に参加しているメンバーによる論文を集めたものであるが、今後は多くの研究者、とくに若い研究者たちに門戸を開き、記述研究論文を掲載していきたいと考えている。